

スピノザ政治思想の一断面

——特に、「神学政治論」第一六章及び

「国家論」第一章・第二章の分析を中心にして——

藤 本 吉 蔵

目 次

- 一 はじめに
- 二 文献読解への予備作業
予備作業一、「神学政治論」について
予備作業二、「国家論」について
- 三 個物としての人間
- 四 欲望と自然権
- 五 自然権と打算的理性
- 六 自存力の増大
- 七 おわりに

一 はじめに

此の小論では、一七世紀社会契約論者の代表とされるスピノザの政治理論をとりあげ、既成宗教批判を基底にして構築した彼の社会契約（*pactum societatis*）に関する論理展開、また其れが如何なる理由で挫折したかを私なりに探つてゆきたいと思つてゐる。

スピノザ諸理論の根幹をなす理念は、「神即自然」の理論構成をとる汎神論である。此の理論は、デカルトやスコラ学者等が用いたタームや表現方法を活用して構築されたものであるが、構造的には、思考方法の継承をデカルトに負いながら、問題意識次元で乖離を示すはめになった実体（*substantia* = *zelfstandigheid*）の唯一性、スコラ的人格神の否定、神と自然と実体との等置、実体論の視座から論難した予定説或は目的論の否定、等の特徴としてゐる。^②

ところで、スピノザは社会契約説を論述するに当り、先ず人間の自然状態を相互敵対状態と推論し、次に人々は其の状態から脱する為に明示または黙示の契約を互いに取交して、最終的には国家状態をつくりあげるといふ論理形式を取る点で全面的にホッブズに倣つてゐるのであるが、其の理論構造を汎神論に立脚して構築してゐるところから、ホッブズ理論とは異質の契約説を論定するに至つた。一六七四年六月二日、ハーグからイエレス（Juring Jelles）^③に宛たスピノザ書簡第五〇の一節で、^④「国家論に関して私とホッブズとの間の相違についてお尋ねの点、其れは自分が自然権（*naturale jus*）^⑤を国家状態においても常時損はず保持しており（*semper satum tectum conservo*）」従つて、

如何なる都市の政府も力において市民にまさっている度合に相当する丈の権利しか市民に対してもたないものと私は考える。此れは自然状態に於て常道なのであるが」^⑥と少々難解な表現ながら彼自身とホッブズとの社会契約論上の根本的相違について述べている。つまり彼は、「人々は平和と自分自身の防衛の為に必要であると考える限り、相互に契約を結んで総てのものに対する『自然権』をすずんで捨てるべきである」^⑦と論述して、契約に基づく「自然権」の全面的放棄を説いているホッブズ理論とは対照的に、人々は契約を取交して国家状態をつくりあげた後も「自然権」をそのまま保持している旨を論じて、社会契約の締結後に於ける「自然権」の把握の仕方に関しホッブズとの根本的差違を見出しているのである。而も此の見解は、後述するように、ホッブズ理論とはかけはなれたスピノザ独自の国家論や体制宗教に対する批判の重大な基点となつて行くのである。

さて、スピノザの政治学上の著作には、「神学政治論」(Tractatus Theologico-Politicus)^⑧と彼の病死により未完のままになつてしまつた「国家論」(Tractatus Politicus)^⑨とがある。「神学政治論」は二〇の章から成り、内容的には「聖書解釈方法の確立」や「体制宗教批判に基づく真の宗教 (religio vera) 像の確定」を試みた第一章から第五章までの部分と、「自然権」や「国家の必然的成立過程」等を論述した第一六章から二〇章にかけての政治理論で構成されている。^⑩「国家論」は全体として一章に分けられ、第一章「序論」から第五章「国家の目的」までで、「自然権」や「自然状態」或は「国家の目的」についてのスピノザの基礎的な見解が述べられ、「国家の諸形態」について取り扱っているのが第六章以後一章までである。^⑪特に、社会契約説の解明という点では、「神学政治論」の第一章、及び「国家論」の第一章、並びに第二章が重要であると思われる故、それ等の分析作業が次項以下の課題をなしている。けれども其の場合、「神学政治論」第一六章の一部が「国家論」第二章八節及び二二節に、また第一七章の

内容の一部が第三章八節に包摂されている事実、或はまた、二著には内容上無視し得ない相違が存在すると主張する研究者もいるので、此処では二著を一体として取扱ひ、スピノザ政治理論として考察することにした。其れとともに、「分析の精密さ」と彼の「政治原理の総合的把握」という観点に立つて、「エチカ」を始め、「短論文」や「デカルト哲学原理」、其の他彼の著作の中に散見される政治理論を補足的に付加することにした。⑬⑭
 ⑮
 第四部でも「国家の基礎」について思索しており、また「短論文」第二部第三章、及び「エチカ」第三部では彼の政治思想に具体的実践性を与える「感情の性質及び法則」について論述しているからである。

二 文献読解への予備作業

前述の如く、スピノザは政治思想に関して、「神学政治論」及び「国家論」の二著を残しているが、其等の文献を読解する為の予備作業として、著作年代、著作動機、及び当時のオランダの政治事情について極く簡単に触れることにする。⑯
 ⑰
 ⑱
 要であり、其の二著の持つ特殊性格と内容とを理解する上で欠くことができないと思われるからである。

予備作業一、「神学政治論」について

さて、拙稿「私のスピノザ研究の覚え書き」⑰で既に検討した如く、ブレイエンベルフ及びヨハネス・バウメーステルへ宛たスピノザ書簡から、ラインスブルフからフォールブルフに転居した後、彼は「エチカ」の執筆に取りかかり、一六六五年の春から夏にかけて、其れを完成させつつあったことを我々は推定し得た。ところがまた我々は、一

六六五年九月付けオルデンブルクのスピノザへの返書の一節、即ち、「貴方は、哲学を窮めておられるというよりは神学を研鑽しておられる御様子ですね。と申しますのは、天使や奇蹟に関する思索の結果を認めておられるからです」という件から、同年の半ば、彼は突如「エチカ」の執筆を中止して「神学政治論」の作成に取りかかっているとの推測が可能だからである。^③最終的に、此の著作は、五年後の一六七〇年に完成し、同年世に出す運びとなったのであるが、同書の内容が当時に於ては極めて急進的な体制宗教批判を展開している故、七〇年代の世情不安と蒙昧な狂信的ラビやキリスト教聖職者等からスピノザ自身に降り懸かる危険を考慮してか、発行所アムステルダムをドイツのハンブルクとし、発行人リューウエルツをキューンラートと変え、匿名を用いるに至ったのである。^④

ところで、此の著作の動機については、一六六五年一〇月付けオルデンブルク宛スピノザ書簡第三〇の文脈から推測し得ると考えられる。彼は其の書簡で、「私は目下聖書についての解釈を一つの論文に纏めております。此の著作の動機は、第一には、神学者達の諸偏見です。此の偏見は、私の考えでは、人々の心を哲学へ向わせるのに最大の障害になっております。ですから私は其等の偏見を指摘し、其れをより聡明な人々の精神から取り除くように努力しているのです。第二には、民衆が私について抱いている意見です。私を絶えず無神論者と非難する意見です。私は可能な限り此れを排除せねばなりません。第三には、哲学を窮め且つ其れを表現する自由です。此の自由をあらゆる手段で私は擁護したい」と打ち明け、無神論者という彼自身に対する非難、神学者達が気づかずに長年抱いて来た神に関する偏見の除去及び思想言論の擁護の三点を著作動機として掲げている。ところが、彼はこうした動機からものした著作にもかかわらず、出版後間もなくユトレヒトの神学教授マンスフェルト始め当時の知識層から、彼の批判的聖書解釈は無神論を意味するとして弾劾され続け、終には一六七四年七月一九日付けウィレム三世の告示に依り禁書とさ

れるのである。本稿の目的上から詳細に検討することは避けるが、フェルトホイゼン、アルベルトブルフ、ニコラス・ステノ或はオルデンプルク等と交したスピノザの往復書簡の中に、其の弾劾理由や状況が散見される。

さて、彼の生涯を賭けた仕事として自らも任じ人も認めた「エチカ」の完成を中止してまでも此の著の述作に専念するに至った理由が当時の歴史的背景にもあつたのではないのかと思われてならない。

周知の如く、北部低地地方諸州から成るネーデルラント共和国は、一六世紀末頃から、宗教絶対主義圧制をとるフェリペ二世の属領支配に抵抗して決起し、ユトレヒト同盟結成を経て、一六〇九年に事実上の独立を果たした^⑨。しながら、独立当初から、内政的には、党派的な主権争いと其れに絡む宗教問題の為に絶え間ない闘争が続き、対外的には、イギリス及びフランスとの抗争に明け暮れ多難な状態におかれていた。独立の推進力となつたのは、外国貿易に依つて巨大な経済力を握り、世襲的に州議会議員となつて政治権力を持ったレヘント (regent) と呼ばれる大商人層であり、また反乱運動を直接指揮して北部七州の軍事的解放に功績をあげた総督ウイレム・ファン・オラニエとその子マウリツであつた。^⑩レヘントは、特にホラントやゼーラントを中心に、分業的州経済メカニズムを基軸とする俗にいうオランダ型社会構造に立脚し、利潤の源泉である商業取引の自由と中央集権的権力の経済への介入排除を求め、横軸思考型のユトレヒト同盟規約に基づく州主権主義的割拠主義を取るのである。^⑪より具体的に言うならば、諸州の特権や慣習の不可侵性を守り、且つ連邦の重要議決は全会一致をもつてするという原則を採用するとともに、宗教問題に関しては諸州独自の処理にまかせながら連邦の相互協力をはかるというものであつた。^⑬一方、土地保有を基幹として当時もまだ「自然経済的再生産方式」^⑭から完全に脱却できない状態にあつたフローニンゲンやフリースラント等の内陸農業諸州及び富裕な北部のレヘントに対抗し得る程経済競争力を持たないオーフェルエイセルやヘルデ

ルラント等の中小商業都市から成る東部諸州は、封建的縦軸型思考を取り、中央集権制を強め、レヘント寡頭制的専横に対する保護を求めて総督の政治的台頭を願った。¹⁵ 当時の総督職は、国制上からみると、州または連邦議会の任命する一種の官吏であったとはいえ、「陸海軍の最高司令官であり」、諸州間に発生する紛争の調停者とされた故、連邦議会のラート・ペンシォナリス (raad pensionaris) と並んで主権者に近い存在であった。¹⁶ ¹⁷ それ故、共和国は党派的な諸州間の争いが、絶えず繰り返えされることになったのである。

ところで、こうした経済問題から派生した横軸思考型と縦軸思考型とを底流として組み立てられた政治的亀裂に当時の宗教論争が絡み、問題を複雑にした。オラニエ派は「神の予定や摂理の絶対性或は原罪論の確信等を主張するとともに、州議会の信仰への介入に反対し、宗教問題は中央集権的全国教会会議の開催をもって民主的に行なうべきである」とするカルヴァン教正統派と結び、¹⁸ 他方レヘント派は、エラスムスの流れを汲むアルミニウスを信奉して墮落以前に於ける人間の善性を認めるとともに、宗教的個人主義に立脚し、また神の救済に際しては個人の自由意志が積極的に評価されるものと考えて神の予定説に人間の意志の参与を認め、而もまた、信仰に対する世俗権力の優位を主張するレモンストラント派を支持した。¹⁹ 特に此の派は、大商人や大製造業者の「個」を重要視する経済活動に都合のよい立場にあったと思われる。

さて、此の様な宗教的政治上の争いは急速にエスカレートし、一六一九年にはレヘントの指導者オルデンバンネヴェルトの殺害やグロチウスの幽閉事件で知られるマウリッツの反乱が起り、²⁰ また一六五〇年には、レヘント派勢力の撲滅を図った総督ウイレム二世のクーデタが勃発した。²¹ 此等の企ては、不成功の結果に終わったのであるが、其の時捕えられたレヘント派の一人の子息が後にスピノザの庇護者と知られたヤン・デ・ウィットであった。彼は一六五三年、

レモンストラント派やレヘント派を率いてラート・ペンシォナリスとなり、国の指導権を握って、政治的手腕を奮い、クロンウエルの航海条令が原因となつて起つた第一・第二対英戦争を遂行し、また一六六四年に流行したペスト病対策に苦慮し、同年末に侵略して来たミュンステル司教軍に対する防衛戦に奔走した。^{②②}宗教問題については寛容主義を取り、「言論の自由」を標榜し、^{②③}政治当局が教会管理を行なうという方針を勵行した。^{②④}しかしながら、カルヴァン正統派、少数の旧教派、総督派等は国家が危難に遭遇する度に、其の原因が宗教を輕視した無神論者、ウイットの政治政策の失敗にあると決めつけ、説教壇から彼の政治を誹謗し且つウイレム二世を国家主権者に擁立して総督派の権力奪回を企てた。此の動きに対し、ウイットは国家権力の堅持を目的とする政教分離原則を政策綱領として掲げて宗教家の政治への干渉を斥ける為の現実的諸対策を遂行するとともに、また彼の政策の理論づけを諸学者に求めた。^{②⑤}当時、政教分離をテーマにして、「政治講演」、「政治の権衡」、「オランダの利害」或は「教会の權利」等の數種の著作が公にされた。そしてこうした書の最も勝れたものとして「神学政治論」があつたと思われるのである。^{②⑥}無論、此の書の中で論述されている諸説は、スピノザ自身の哲学を前提としているのではあるが、其の成立事情とテーマについて考察する場合、以上の歴史事情と深い係りをもっていると思われてならないのである。

予備作業二、「國家論」について

「國家論」は、スピノザの病死數ヶ月後、即ち一六七七年一二月にアムステルダム書店リユーウヘルツ（Rieuwertsz）より「遺作集」の一片として出版されるに至つた。^{②⑦}「我々の著者は其の死の少し前に書き始めたもの……しかし死が早すぎた為に、彼は此の論文を完結することが出来なかつた」と述べている「遺作集」の序文内容、及び「國家論」第一章五節、第二章一節や二四節で、完結された「エチカ」と「神学政治論」とを前提にして「國家論」

の作成に取り掛かった旨を明確にしている事実^{②③}、等から此の著の執筆時期を推定すると、「エチカ」完結後の一六七五年秋より一六七七年二月に至る約一年半の間に其の筆をとり続けていたものと考えてよいであろう。^{②④}

さて、「国家論」執筆の動機についてスピノザは、イエレスに宛たと思われるスピノザ書簡第八四で、「国家論の執筆を以前から勧誘していたイエレスに答えたもの」と述べているが、「神学政治論」で取り扱った政治理論の大部分を、幾何学的秩序に従ったような論理構成方法を匂わせながら、「国家論」の前半に集約させ且つ其の内容を補充している点を窺い得ることから、国家理論の再執筆を強く意識して作成に取り掛かったものと思えてならない。^{①⑤}

ところで、此の「国家論」はレヘント派ラート・ベンシオナリス・ウィットの指導の下に曲がりなりにも共和制が確立されていた時代に書かれた「神学政治論」と異なり、一六七二年八月二〇日にウィット兄弟がウイレム三世を擁護する総督派及びカルヴァン教徒に率いられた民衆に依って、ホラント州市庁舎前広場で虐殺されるという事件^{③⑥}が起こり、其れを契機に共和国が急速に中央集権的、軍国主義的傾向へ進みつつあった時代に執筆されたものである。^{②④}一六七〇年代になると、レヘント派が長年スローガンとして掲げ且つ其れに従って遂行した政策、即ち個々の州の特殊性を重視した州主権主義的割拠主義政策、の弊害がネーデルラント共和国に重大な危機をもたらした。^{③⑤}内政的には連邦州議会財政の根幹をなす軍事費負担の不平等を各州間に引き起こし、其れが原因となつて、陸海軍の分裂解体及び各州間の権力関係の格差を大きくするという結果を招くことになった。また対外的には、連邦議会の内紛による共和国基盤の弱体化がフランスやイギリスからの共和国への内政干渉を増大させるという事態を招いた。一六七二年春、仏軍がネーデルラントから、ミュンスターとケルンの軍隊が東部から、イギリス・フランス連合艦隊が海上から共和国に迫った時^{③⑦}、一方では、一般大衆及び総督派都市貴族がイギリスと親縁関係にあるウイレム三世を共和国の総督に

おして陸海軍を彼に掌握させ、イギリスと協定してフランスの侵略に対抗しようと運動し、他方では、ウィットを宗主とするレヘント派は弱体化した共和国の軍事力を補ってイギリスとの防衛戦に備えようと図りフランスとの和平交渉を策していた。³⁶ 二党派はやがて対立抗争し、前述の如く、レヘント寡頭体制の崩壊という結果に当然のことながら繋がるのである。

さて、こうした歴史的背景から、「神学政治論」の内容が純粹に理論的であったのに比べて「国家論」では、理論の他に經驗的な考察、或は實際的な配慮が多く加えられることになったのである。³⁷

三 個物としての人間

スピノザはホッブズと同様に自然主義的立場に立って政治理論を展開するのであるが、其の場合、先ず、「人間が悩まされる諸感情を人間が自己の罪（即ち原罪）の故に陥る過誤である」と考える哲学者或は理論家は今日まで「あるがままの人間」を前提にせず、「そうあってほしい」と思う様な人間を脳裡に浮べて国家に関する架空論（chimera）を夢想した為、³⁸ 国家の理論と実践とが掛離れるという失態を犯してきたと指摘している。³⁹ そして彼は其の反省に立って「国家の諸基礎について論ずるに当り、国家と既成宗教とを考慮外において」の各人の「自然権」（*jus naturale*）について取り扱う必要があると考え、宗教や国家に先立つ「自然」としての「あるがままの人間」に関する共通概念を確定しようと試みている。⁴⁰ 彼は、政治を論ずるに当り、道德律の創造者としての神、或は道德意識の要請としての神、即ちキリスト教を問題意識から排斥するのである。⁴¹

さて、其の確定化を遂行するに当り、彼は「神即自然」という視座に立脚した汎神論的世界観から政治理論の構成原理をなす「自然権」の内容及び根拠について推論している。即ち彼は、実体 (substantia = selbstandigheit) と自然とに等置される不変不易な第一起動者としての神は、夫々が自己の類に於て完全な無限数の属性 (attributa) から成り、存在する多様な個物の総てを実体の変状 (affectiones = modificationes) として自己内に含む^⑧という見解に立脚し、且つ神は恰も三角形の本性から其の内角の和が二直角に等しいことが必然的に生ずるのと同様に、自己の本性の法則に従って、あらゆるものを意識的にではなく、必然的に且つ無限に産出するという論理に基づいているのである。^⑩つまり、神に内在するものは総て形相的に自然のうちに存在するという「神即自然」観を基底にして、自然から決定されている通りに行動し、其れ以外には行動しないという性質の個物 (res particulares) に着目している。^⑪蓋し彼は、政治社会の構成主体をなす人間を一般概念化する為に、時間や場所、或は教会の律法や「罪・功績・正・不正」等の道德概念から掛け離れた「自然」としての個物、言い換えれば「肉と骨」で構成され、生まれ且つ死に至る様態^⑫としての個物にまで還元しているのである。まさに其処に於てスピノザは、「POU PAMAIΟΥΣ, 77」を例証しながら、自然には「目的論を始めとして、善や悪・美や醜というような価値的区別は客観的には存在しない、というのは総ての行動が『自然権』に従って行なわれる限り、其の結果がどうなるかというような問題意識については自然の関知しないことであって、^⑭我々にとって甚しく奇異、不条理、極悪に見えることも実は自然のうちに存在しないのであると論断するのである。^⑮レオ・シュトラウスや加藤教授が、「自然権」の主体を飽く迄も人間に限定して論述したホッブズの自然状態論に比較して、スピノザの其れは「宇宙論的性格」を秘めていると指摘するのは此の爲である。^⑯

ところで、スピノザに依れば、自然の権利及び自然の法則(jus et institutum naturae)とは各々の個物が一定の方法で存在し且つ活動するように自然から決定された個物の本性の諸法則であり、^{①⑦}「其れに従ってあらゆるものが生起する自然の規則」に他ならないと規定している。例えば、魚が水中を我物顔で泳ぎ廻るのも、また強大な動物が弱小動物を食べるという弱肉強食も「自然権」なのである。^{①⑧}而も、彼の個物に関する世界像に依ると、個物は神の属性をある一定の仕方では表現する様態、^{①⑨}言い換えれば、其れは「神が存在し且つ活動する能力をある一定の仕方では表現するもの」であり、其の上また個物は、如何なるものも自分が滅ぼされ得るようなあるものを、或は自分の存在を除去するような如何なるものをも、自己の内に含んでいない許りか、^{②①}寧ろ各々の個物は自分の存在に障害となるものを除去しようとして努力する本性を保持するという論理が展開される。それ故、「自然権」は、取りも直さず「各々が自己の為し得るあらゆることに對して最高の権利を持ち、且つ自己の力が及ぶ限り自己の状態に固執するように努める」という性質の自然の力そのもの(ipsa naturae potentia)を意味し、^{②②}また外部の原因に依る場合でなくては滅ぼされ得ない力そのものであると解されよう。^{②③}此の見解に基づけば、自然の権利は自然の力が及ぶ所まで及ぶことが確實で、^{②④}従つてまた、自然状態は「個物相互が他を滅ぼし得る限りに於て相反するという本性を互いに持つ」という状況を意味すると考えていいだろう。

さて、こうした自然の権利・規則或は自然の力、等の概念は、「他者に依つて滅ぼされることに對する抵抗」^{②⑤}というアイデアを含む「自己の存在維持」を命題としており、其の点では、極めて消極的な存在論的視座に立脚するものであるといつてよい。しかし、其れらの概念を推考するに當り、「人間は賢者・愚者の別を問わず、自然の一部としての個物であり、常に自然の諸法則に従つて行動している」^{②⑥}と彼は論定しつつ、平面的な把握ではあるが、個物の存在

論的平等性或は普遍性の原理的確定化、言い換えれば、形而上学的実在としての個物たる人間の一般化を図り、且つまた、一般個物相互の自然状態を推論し、国家理論構築の基底に「自然的個」を据えようと模索したものと思える。其処では、ホッブズの如く、あくまでも個物即ち個人に視点を置いて「自然権」を考えるのではなく、自然全体に脈搏っている自然のしくみ、即ち彼の解する因果の必然に沿って考える結果、「法則」や「規則」という概念に重きを置くという観点に立ち、而も、其の視座から「自然権」と自然法が対立せしめられない。^⑪まさに其処に於てスピノザは、「人間と自然に於ける他の個物との間に、また理性を賦与された人間とまことの理性を知らない人間との間に、更にまた愚鈍乃至精神錯乱者と精神的に健康な者との間に何等の相違を認めず」、各個物は常に自然の諸法則に従って行動していると論断しているのである。^⑫

四 欲望と自然権

さて、スピノザにとって、あるがままの「人間の本性」を確定する為の作業を遂行する場合、消極的・静態的個物としての「人間一般化」を図るだけでは、まだ不十分であった。何故なら、彼は、拙稿「私のスピノザ研究の覚え書き」^⑬で検討した如く、デカルト理論に倣って「延長 (extensio) と思维 (cogitatio) との二属性が実体の中で合一していて実体の二側面を表わすように、延長の様態たる身体と思维の様態たる精神 (観念) もまた人間という同一性の両面を表わす」と規定し、^⑭其の観点に立つて、身体の観念たる精神と其の観念の対象たる身体との対応性を説く「身心並行論」を基底にして、人間を精神と身体の複合体から成る個物と意識していたからである。^⑮まさに其処に於

て彼は、存在論的個物としての人間に身心並行論を基底にした精神という概念を賦与して、「人間精神が身体の変状の觀念化を通して自己保存への努力を意識する」という積極的な性質（essentia）を人間に見出し、而もまた彼は、其の意識を人間に固有な「自然権」そのものであると規定して、爾余の物理的個物から人間を区別しようと試みている。^④其の論理方法として、彼は先ず、「身体の変化の觀念として發生する感情は自然の必然的現象に他ならず、身体の活動能力そのものを増大或は減少させ、促進或は阻害させる」と論述して並行論に基づく身体と感情との關係に着目し、次に其の視座に立つて、諸感情は欲望・喜び・悲しみ、から成る三基本感情より派生するのであるが、其等のうちでも、特に、「欲望とは自己保存の衝動意識であり、『人間の本質が其の与えられた各々の様態に依つてある事をなすように決定されると考える』限りの人間の本質そのもの」^⑦、言い換えれば、欲望（cupiditas）とは自己の維持に役立つものを求めようとする努力（conatus）^⑧であり、其の限りに於て人間を諸々の行動へ駆り立てる人間の本質そのものである」という感情論を展開し、最後に此の理論を前提にして、「精神は明瞭判然たる觀念を保持する限りに於ても、ある無限定な持続の間、自己の有に固執しようと努め且つ此の自己の努力を意識している」^⑨と論じて、他の個物とは異なる人類に固有なものと^⑩して、欲望に基づく「自存力の増大」を自ら意識する積極的な欲望意識を人間の本質として確定している。^⑪というのは、前章で検討した如く、各個物ができる限り自己の状態に固執しようと努めるまさに此の欲望に嚮導れさせた自己保存への努力こそが最高の自然法であり、^⑫「万物が其れに依つて生起する自然法」から必然的に生ずる個物としての人間の「自然権」に他ならず、「各個物は自己の状態に固執する最高の權利を保持する」と帰結されるからである。^⑬

ところで、欲望に基づく自己保存を命題とする人間は、身体の変状の觀念即ち受動感情に依つて自己を意識するの

であるから、言い換えれば、其の変状の觀念に依つて外的個物を知覚する感覺知 (imaginatio) ^⑭ に依つて意識された限りに於ける喜び或は悲しみの感情を持つて自己を認識するからこそ、あるものを善と判断するが故にそのものへ努力し、意志し、衝動を感じ欲望に駆られるのではなく、逆に自己保在に有益なものとして意志し且つ欲望するが故に善と判断し、また逆に有害と感じるものを惡として必然的に忌避する。而も、此の受動感情は、我々を刺激する対象の種類だけ多くの variety ^⑮ に富み、それ故、結果的にみると、此の感情は善惡の判断の多樣化を招き且つまた人間は直ちに諸々の異なつた方向に引摺られることになる。^⑯ つまり、自然狀態に於ては、前章で触れた如く、善惡の概念が存在しない仕組みになっており、また「自然權」に依れば、何人も自分が欲する場合以外は他人の意に従う義務 (obligationes) ^⑰ がなく、且つ自分自身の判断で善或は惡と承知するものでなくては善或は惡と認める義務はないのである。まさに此處に或てスピノザは、「若し人間が自然の法則に従つて理性に導かれるように義務づけられているとしたら、人間は皆必然的に理性に導かれるであろう、何故なら、自然の法則は神の法則であり、此の法を神自身が存在するのと同じ自由を以つて定めているからである、しかし現実的には、欲望に溺れる愚者が自然法に依つて賢明な生活を打ち建てるように義務づけられていないし、病人が健全な身体であるように義務づけられていない」と断じて、人間は神的理性に依つてではなく欲望に導びかれていることを指摘している。斯くて其處では、人間は自己の裁判官 (suindex) ^⑱ となることによつて、自己に有益であると判断するところの一切をあらゆる方法で、即ち暴力に依つて、或は欺瞞に依つて、或はもっと容易と思われる何らかの手段に依つて自分の手に入れてよいのである。^⑲ 従つて、各人は自分の意図の達成を妨げようとする者を自分の敵 (hostis) ^⑳ と見做してよいのである。^㉑ それ故、宇宙論的含意を秘めていた自然狀態に於ける人間は、他の動物よりも一層多くの事柄を為し得るに従つて増々互いに恐るべき

存在者となり、「人間は本性から相互に敵である (homines ex natura hostes sunt)」という状態に陥るのである。^②

五 自然権と打算的理性

スピノザは、自然状態論の展開にあたり、先ず、人間の自己保在という意識を積極的に肯定し、次に其れを一切の道徳的制約から解放して「争い・憎悪・怒り・欺瞞、等を、約言すれば凡そ衝動がそその如何なることをも拒否しない」という「自然権」を人間は保持すると論定し、更に其れに結果する相互敵対状態を自然状態として論理構成したものであるが、今度は逆に其処から、相互敵対状態に於ける人間の「自然権」の無力性を論じている。即ち、彼は「延長と場所的運動から純然たる機械論的因果に依って、一切の自然現象を説こうとした」^②デカルトの連続的物体の物理学的自然観を参照しながら、我々は他のものなしに自分自身で考えることができないような自然の一部であり、其の限りに於て人間は絶えず他から働きを受け、従って人間が存在に固執する力は制限されており、外部の原因の力に依って無限に凌駕されると考えるのである。そして此の帰結として彼は、自然状態に於ける各人は自己を他の圧迫から防ぎ得る間丈自己の権利の下にあることになる故、「人間の『自然権』は其れが単に各人きりのものであり且つ各人の力に依って決定される間は無に等しく、現実には於てよりも寧ろ空想に於て存在するに過ぎないということになる」と論述している。つまり、人々は、自然状態に於て自己の「自然権」を保持するのには何等の保証をも持っていないのである。^③蓋しスピノザは、自然状態に於て、推論上「自然権」を十二分に行使し得た人間が、現実的に其処では「各人単独で総ての圧迫から身を防ぐことが困難なのである」^④から、實際上「自然権」を保持することは極めて難し

いということを描し、其処に自然状態から国家状態への「人間の移行の不可避性」自然性の論証」の契機を見出し
ているのである。^⑧

ところで、スピノザは、自然状態に於ける「自然権」のかかる無力性を克服する為に、暴力的闘争状態たる自然状態に對立し且つ其の状態の抑制を目的とする「自然法」、即ち「神の理性に依つて見出された掟若しくは一般的な規則」^⑨そのものゝ平和の爲の有利な条件を示唆する理性の秩序に他ならない法則、を用いるというホッブズの論理方法を取らなかつた。なぜなら、自然の状態は、スピノザの見解では、或る意味で共同生活を営んでいる現在にも及んでいるからである。^⑪彼は、「自然権」に「自然法」を對立せしめるという考えを採用しないで、感性的欲望を相互に規制し得る普遍的人間の本性の法則を規定し且つ其の法則に根差すことに依つて人間の眞の利益を旨指す能力として理性(ratio)を定め、更にまた、其の理性で感性の自己抑制を図るという論理構成を取っている。つまり、彼は感情の理性化による感性の克服を原理として考へていたのであり、此の理性に依つて始めて人間的な存在や作用が成り立つ仕組みになつてゐる。^⑭彼に依れば、人間の本性の普遍的法則とは、凡そ何人も「自分が善と判断する事柄を其れより大きな善を得ようと望む希望或は其れより深刻な損害を被るかも知れないという恐怖からでなくては此れを蔑ろにすべきではないこと、また何らかの惡に對しては其れより大きな惡を避けようと望む爲に、或はより大きな善を獲得しようとする希望からでなくては此の惡に忍従しないこと」^⑮の二点を柱として構成されている。言い換えれば、其れは、各人が二つの善のうち自分にとってより大であると判断するものを選択し、また逆に二つの惡のうちで自分にとってより小であると思へるものを選択するという法則を意味する。^⑯而も彼は、此の法則を広義の「自然権」の一つの場合とみる。^⑰というのは、其れは根本に於て我々の生存維持・存在保持の原則に従うものであり、其の意味で此の法

則は「自然権」の延長と考えられるからである。¹⁸⁾

斯て、スピノザが此の法則に根差して人間の眞の利益を目指す能力を人間的理性と規定する点で、政治理論に於て用いられている彼の理性というチームは、打算的な、便益手段の計算能力を指すものと解されよう。¹⁹⁾ まさに其処に於てスピノザは、「アムステルダム」の市長フッデが説いた『最大の法則と最少の規則についての比較要約』に関する検討」を始め、ホイヘンスのレンズ錬磨技術理論、或はホラント州での個人年金の円錐体の状況並びに一次年金制度に対する終身年金制度の価値について説いたウィット理論²⁰⁾、等を理解する為の基礎として論述した「虹に関する代数的論談」や「確立に関する論談」²¹⁾を二者択一の便益をはかる上での計算能力の実践的試みとして掲げ、人間的理性に関する論理構築の十全化を図るのである。²²⁾

さて、人間は「欲望の囁き」²³⁾にのみ従つて生活すれば、敵意・憎悪・激怒や欺瞞が横行して絶えず不安な生活を送らざるを得ない状況に陥る故、「自然権」の無力性を招く「自然状態」をより小さな善として斥ける必要がある。従つて、人間的理性の法則・理性の一定命令に従つて生活する方が人間にとって遙かに有益であり、そして其の爲には、人々は必然的に一つに結合する必要があるのであるが、その場合、各人が万物に対して自然から与えられた権利を共同で所有するようにし、且つまた、其の権利がもはや各人の能力と欲望に依らず、万人の力と意志とに依つて決定されるように共同することをより大きな善として選択しなければならない。²⁴⁾ つまり、人々は、人間的理性の命令からのみ一切を導き、他人に何らかの損害を引き起こすような欲望を抑制しつつ、自分が望まないことを他人にも行なわず、他人の権利を自己の権利同様に守るということを契約する (Pacisci) のである。²⁵⁾ 其処に於てスピノザは、「権利の共有を通して『自然権』の拡充をもたらす契約 (Pactum) に依る国家状態をより大きな善として選択する」²⁶⁾と

論断する。

ところで、此處で言う契約には、正・不正の道德的な意味合い或は、Sollen 的な概念を含まない。如何なる契約も利益或は危険への顧慮が介在する間に限つて効力を持つのであり、それ等が失われれば契約も同時に崩れて無効になる。^⑦例えば、彼に依れば、生命保全の為に盜賊と欺瞞的に結んだ契約等は、盜賊より難を逃れた後、完全に其の契約を履行する義務を負わないというように、自分にとって甚しい損害を招くような約束は破棄するのが「自然権」に従つた道理なのである。^⑧自己の「自然権」は自己の力に依つてのみ決定されるからである。従つて、スピノザ政治理論にあつては、国家はギリシア思想でいうような「徳」を意味せず、結ばれた約束を破棄すれば、其処から利益よりも損害が破棄者の上に及ぶようにしておくことが、契約に於ける国家の組織に際して肝要となる。^⑨

六 自存力の増大

「自然権」の無限の行使を許すスピノザ自然状態論に於ては、各人は他人の力の下にある間は他人の權利に従属し (alterius esse juris)、此れに反して「あらゆる暴力を排除し、自分に加えられた害悪には自分の判断に従つて応酬し得る限りに於て、約言すれば、自分の意向に従つて生活し得る限りに於て、自己の權利の下にある (in iure esse)」ということが帰結される。^①従つて、「自然権」を持つことが自己の權利の下に在ることになるのであるが、自然状態に於ては「各人が単独で総ての圧迫から身を防ぐことが困難」とされる故、人間は殆ど「自己の權利の下」に^②よりも「他者の權利への服従状態」にあることになるのであるから、前章で述べた如く、自己保存を図る為には「自

然権」の理性化によって社会的に結合することが人間に要請される。

ところで、「自然権」を *potentia* ^④ と考えるスピノザにとって、人間が社会的に結合するということは人間相互の「自然権」の結合乃至力の増大を図るということを意味する^⑤。而も彼にあつては、此の力の増大に依つて生ずる共同の力乃至権利は「自然権」の無力性を互いに補充し合つて、「本来の意味の人間的な『自然権』」の主体者として人間を自立させる為の唯一の要因に他ならない^⑦。まさに其処に於てスピノザは、一部分の法則や本性が互いに適合しあつてゐる状況に在る二つの個体が自発的に或は強制的に相互に結合するなら、「単独の場合よりも二倍の能力を保有する」というような一つの大きな個体を構成する^⑧、と説く個体の本質に関する理論を基底に、「若し二人の人間が一致して力を合わせるなら、二人は共々、単独である場合よりも一層多くのことを為し得、従つてまた一層多くの権利を自然に對して持つ^⑨」と論述するのである。蓋し、多くの人々が斯有る仕方で親密な關係を結べば結ぶ程、益々多くの權利を總ての人々が共有することになる。つまり、人数が増加すれば其の増えた分丈多くの權利を總ての人間が分有するという訳であり、斯て其処では、力の増大を図つて人間が共通の權利 (*jura communia*) を保持しない限り人類に固有な「自然権」を考えることができないのであるから、人間にとっては人間ほど有益なものはないということになる^⑩。

さて、斯様な力の結合による力乃至權利の増大を説く原理は、人間本性の普遍的法則に根ざす便益の計算能力と相俟つて、人間を必然的に自然状態から国家状態へと嚮導する^⑪。それ等二つの概念に於ては、孤立への恐怖を常に内包している人間は「本性上必然的に国家状態を欲求する」動物であり、人間が国家状態を全然解消してしまうというやうなことは決して起こり得ないという論理が帰結される^⑫。まさに此処に、シュトラウスが指摘する如く、「首尾一貫

した自然主義」に立つて國家の自然的成立過程を論証しようとしているスピノザの論理基點が見いだされるのである。^⑬
ところで、スピノザは、「自然權の結合に基づく力の増大」に依つて生ずる共同の權利を統治權 (imperium) とし、そして其れを共同の意志 (communis consensus) に基ついて國事の配慮をなす者、即ち法律を制定し、解釈し、廃止し、都市を防備し、戦争或は和平を決定する、等の國事を司る者の手中に絶對的に握らせる主權國家について論じている。^⑭ 其處では、國家の力乃至威嚇を恐れて、或は國家狀態を愛する為に、國家の權利の下に生活する各人は、一方では、「自然權」を保持しつつ^⑮「國法に基ついて國家の一切の便益を享受する」^⑰個人として、他方では、「國家に『自然權』を委讓して國家の諸規定或は諸法則に従うように義務づけられている立場の人間」^⑱として、二重性を持った存在者となる。此の個人は、「自存力の増大」原理と便益の計算能力そのものに他ならない謂ば政治理論上の理性とから構築された國家狀態に於て生活する限り、共同の權利が自己に對して認める以外の如何なる權利をも行使できず、^⑲而も、國家生活を営む為には、國法が評價基準となる正・不正或は罪 (peccatum) 等の概念を承認して、「國家命令を不当と考ても」実行するように拘束される。^⑳ 逆に言い換えれば、打算的理性に基づく國家權力は「自己の魂までも國家に委ねることのない」^㉑個人をあらゆる手段で國家に服従させようと努めるのである。^㉒ 従つて、人々は、國法に従つて國家生活を営む丈では、「エチカが説く道德的理性に沿つた生活を達成できないことが歸結される。まさに其處に於てスピノザは、國家を契約説に依つて導き出した後、國家の目的として「平和と安全」及び道德的理性への服従即ち「自由」を掲げるのである。^㉓

七 おわりに

これまで検討して来た如く、スピノザは、ホッブズやロック等の社会契約論者と同様に、「自然権」という概念を基軸にしながら、「現実存在する人間の本質」を政治理論の基礎と規定して契約説を構築した。其れは、伝統的な原罪論を単なるフィクションに過ぎないと批判しつつ、「自然的個物としての人間―受動感情たる欲望に基づく自己保存への努力及び其の努力の意識化―相互敵対状態としての自然状態―自然状態に於ける『自然権』の無力化―計算的理性及び自存力の増大に依る無力化の克服―契約に基づく国家状態の確立」という論理展開を取るものであった。特に、其処に於て私が繰り返し論述して来たように、当為の法則としての性格を帯びた「自然法」を「自然権」に対立させ且つ其れを前者で抑制しようとするホッブズ理論と異なり、スピノザは「自然権」を理性化して人間を社会的に結合させ、且つ国家状態を確立した後も「自然権」を人々に保持させるという自然発生的な国家を論定し、「人類に固有なものとしての『自然権』は、人間が共同の権利を持って住み且つ耕し得る土地を共に確保し、自己を護り、またあらゆる暴力を排除して、総ての人々の共同の意志に従って生活し得る場合に於てのみ考えられる」と述べたのである。蓋し、彼は人間の「自然権」の確立過程を主権国家一般の成立過程と見ているのである。而も斯様な見解は、「自然権」の命題たる「自己保存の努力は徳の第一且つ唯一の基礎である」と論断する「エチカ」定理二二の系に照らして検討した場合、道徳的生活への不可欠の条件とさえいえるのではないのかと思われる。

ところで、アリストテレスやトマス・アクイナスの政治理念を採らず、政治社会の構成要素を常に感情に左右され

る「ありのままの人間」に求めたという点で、まさに近代政治学の先駆者たる地位を築いた彼の社会契約説が何故挫折してしまったのであろうか。結論を先きにいえば、其れは、「個」としての人間の捉え方、打算的理性の限界及びネーデルラント共和国の体質とスピノザ理論との非融和性にあると考えられる。

「現実的人間の本性」を確定する為に、スピノザは、時代、歴史或は道徳的に全く無記の常態たる様態としての個物を「人間一般」概念と規定したが、其処での消極的自己保存という個物の本性に非十全さが存在することに思いいたって、個物としての人間に受動感情たる欲望という積極的な自己保存の性質を賦与している。つまり彼は、其の付加に依って、一般個物から人間を感情動物として折出するとともに、又力動的な存在への固執と自己拡張を目ざす特殊化された「個」としての人間を自立化させようと試みているのである。まさに其の点で彼は、ライブニッツと同様に近代的「個」の確定化を模索していたものと解されよう。しかしながら、其処で説かれたスピノザの「個」は、「神即自然」の原理を根幹とした実体と様態との関係に基づいて考察されている為、様態の世界に於ける絶えまざる変化に捲き込まれ、そして窮極的には自立性を失って実体に吸されてしまうのである。^⑨

さて、打算的理性は、自存力の増大を図る契約に依り、前述して来た様な不安定な「個」として存在している人間を国家社会へ嚮導するのであるが、道徳概念を一切含まない為に、人々を契約に依って全面的に救済することゝが不可能となる。而もまた、人間が不安定な「個」として存在するということは、打算的理性へのアプローチの多様化を招き、契約要因の多岐化を結果的に引き起こし、契約の締結を困難にするのではないのかと思われる。

ところで、「個」に着目してネーデルラント共和国の社会体質を検討した場合、州主権主義的割処主義を基軸として活躍したレヘントの自由主義的経済メカニズムに依って次第に構築されていった多元的な連邦主義の上に生じた多

種多様な動態としての「個」、即ち、主権獲得を目的とした党派的な団体としての「個」、激しい分裂闘争を繰り返した宗教団体としての「個」或は任意的な市民団体乃至都市貴族の集団としての「個」、且つまたイギリスやフランスとの戦争に依って強く打ち出された対外的な国家としての「個」、等の様様の「個」の容態が乱立する状況下におかれていた。こうした社会情勢の下に崩壊しつつあった共和国を、主権の基礎に関する概念を明確にすることに依って盤石なコモンウェルスに再建し直そうと願って彼は社会契約理論を思索したものと考えられる。ところが、其の理論を構築する上で、彼は「特殊な現存在の享受としての個体主義」^⑫を取り、常に自分自身の利益を追求して自己保存を図る利己的な存在者として、「現実存在する人間の本性」を定め、且つ其れを政治理論の構成要素として規定したのであるが、「個」としての存在起因の確定を人間自身の構造に求めず、自然界乃至実体としての彼岸的な神に求めた為、結果的に非現実的な人間理論並びに政治論に陥り、それ故、彼の構築した政治理論は現実的な社会情勢と融和しない謂ば理念上のものとなってしまったと考えられるのである。

以上、本稿では、文献主義的な立場に立って、彼の政治理論についての明確な確認作業を兼ねながら、「スピノザ政治思想の一断面」というタイトルのもとに彼の社会契約論構築へのアプローチを分析したものである。時間的及び紙面的な配慮から、私のスピノザ研究の覚え書きの一環として取敢えず「神学政治論」の第一六章及び「国家論」の第一・第二章の分析文を試みたのであるが、「主権の性格」、「国家主権と人民との権力関係」、「諸国家間の主権」或は「国家の目的や政体」については次の機会に論述することにした。最終的には、彼の倫理学と政治学との関係进行分析し、彼の総合的な政治哲学を把握するとともに、其の現代的意義を論述したいのである。

注

一 はじめに

① ホッブズ・スピノザ・ロック等が *pactum societatis* に基づく契約国家学説を説いたのに対し、フキヤナンやフッカー等は *pactum subjectionis* に立脚した国家学説を論理立てた。

② 拙稿「私のスピノザ研究の覚え書き」(『国士館大学大学院紀要第三号』一九八三年、一三二～一三三頁)。

③ イエレス(うゝ一六八三)はメンノー派に属するアムステルダム香料商人であったが、晩年、商売を止めて宗教等の研究に取り組む。彼はスピノザの著「デカルトの哲学原理」を出版し、「神学政治論」を友人に蘭訳させ、且つ二、三の友人と共同して「遺稿集」を編纂した。畠中尚志訳、スピノザ往復書簡集、岩波文庫、四三二頁。C. Gebhardt, *Spinoza Opera IV, Epistolae, Textgestaltung*, Heidelberg, 1972, p. 376. *Philosophische Bibliothek*, 96a, Baruch de Spinoza, Briefwechsel, Heidelberg, 1977, S. 327. (以後「Epistolae」といふのは *Epis.* と略称し、主要参考文献とした Gebhardt 版文を掲げる。なお、此の版で書簡に付けられた番号を用いて書簡の種類を示し、年代を明記しないことにする)。

④ もとオランダ文。原書簡は現在存在しないが、スピノザに依ってラテン語に訳されたものが残されている。

⑤ 此の語順は *Epis.* の本文に沿ったものである。

⑥ *Epis.*, I, p. 328～329.

⑦ Thomas Hobbes, *Opera Latina* 3, *Leviathan*, I—XIV, Germany, 1966, pp. 102～111 但し、ホッブズも力に依りて其の生命を奪い取らうとする人に抵抗する権利、自分自身の身体を支配する権利、等は放棄しない旨述べている。此の点については別の機会に詳述せようと思ひます。Howard Warrender, *The Political Philosophy of Hobbes: His Theory of Obligation*, Oxford, 1957, I—XIV, p. 91～92. F. C. Hood, *The Divine Politics of Thomas Hobbes: An Introduction of Leviathan*, Oxford, 1964, I—xv, p. 101. 藤原保信「西洋政治思想史」早稲大学出版部、一九八五年、二五〇頁。

⑧ C. Gebhardt, *Spinoza Opera* III, *Tractatus Theologico—Politicus*, Heidelberg, 1972. 畠中尚志訳「神学政治論」上・下、岩波文庫、一九七六年。Philosophische Bibliothek 93, *Theologisch-Politischer Traktat*, Hamburg, 1976. (以後「T—P」と略称し、主要参考文献とした Gebhardt 版文を掲げる)。

⑥ C. Gebhardt, *Spinoza Opera* III, *Tractatus Politicus*, Heidelberg, 1972. 曹中地地誌「國家體」岩波文庫「一九六
 卅年」Philosophische Bibliothek, 95, *Abhandlung vom Staate*, Hamburg, 1977. (以下「T-P, 政治論」) 中略(參
 本註)に於て Gebhardt 是を「國家體」の「政治論」として論ずる。

⑦ T-T-P. Caput I De Prophetia, II De Prophetis, III De Hebreorum vocatione. Et an Donum Propheticum
 Hebrae is peculiare fuerit, IV De Lege Divina, V De Ratione, cur caeremoniae institutae fuerint, Et de fide his-
 toriarum, nempe, qua ratione, E quibus ea necessaria fit, VI De Miraculis, VII De Interpretatione Scripturae,
 VIII In quo ostenditur Pentateuchon Et libros Josuae, Judicum, Rut, Samuelis Et Regum non esse autographa.
 Deinde inquiriunt, an eorum omnium Scriptores plures fuerint, an unus tantum, Et quanam, IX De iisdem Libris
 alia inquiruntur, nempe an Hebraeis iis ultimam manum imposuerit: Et deinde utrum notae marginales, quae in
 Hebraeis codicibus reperiuntur, variae fuerint lectiones, X Reliqui Veteris Testamenti Libri eodem modo quo
 Superiores examinantur, XI Inquirunt, an Apostoli Epistolae suas tanquam Apostoli Et Prophetiae, an vero
 tanquam Doctores scripserint. Deinde Apostolorum ostenditur, XII De vero Legis divinae syngrapho, Et qua-
 ratione Scriptura Sacra vocatur, Et quatione Verbum Dei continent, incorruptam ad nos pervenisse, XIII Ostenditur
 Scripturam non nisi simplicissima docere, nec aliud obediendam intendere; nec de divina Naturâ aliud docere,
 quam quod homines certa vivendi ratione imitari possunt, XIV Quid sit fides, quanam fideles, fidei fundamenta
 determinantur, Et ipsa a Philosophia tandem separatur, XV Nec Theologiam Rationi, nec Rationem Theologiae
 ancillari, ostenditur, Et ratio, qua nobis S. Scripturae auctoritatem persuademus, XVI De Republicae Fundamentis;
 de jure uniuscujusque naturalis Et civilis: deque Summarum Potestatum Ture, XVII Ostenditur neminem omnia
 in Summam Potestatem transferre posse, nec esse necesse: De Republica Hebraeorum, qualis fuerit vivente Mose,
 qualis post ejus mortem, antequam Reges elegerint, deque ejus praestantia, Et denique de causis, cur Respublica
 divina interire, Et VIX absque seditionibus subsistere potuerit, XVIII Ex Hebraeorum Republica, Et historiis
 quaedam dogmata Politica cancluduntur, XIX Ostenditur, juxta circa sacra penes summas potestates omnino esse,
 et Religions cultum externum Reipublicae paci accommodari debere, si Recte Deo obtemperare velimus, XX

Ostenditur, in Libera Republica unique et sentire, quae velit, et quae sentiat, dicere licere.

- ⑪ T-P. とわらなだ書簡第八回の中。第一章から第六章までの題名は、*知くふべし*。Primum ad ipsum opus Introductionem quasi continet: secundum tractat de Jure naturali: tertium de Jure Summarum Potestatum: quartum quaenam Negotia Politica a Summarum Potestatum gubernatione pendanti: quintum, quidnam sid illud extremum, Et summum, quod Societas potest considerare; Et sextum, quâ ratione Imperium Monarchicum debeat institui, ne in Tyrannidem labatur. 第七章へ第一章まで、Gebhardt 版の Philosophische Bibliothek 95 の題名が付けられている。但し、島中尚志教授は文庫の中で其等の章に題名を付けている。第七章「君主国といふ」、第八章「貴族国家といふ」、第九章「貴族国家といふ」、つぎ、第一〇章「貴族国家といふ」、つぎ、第十一章「民主国家といふ」。

- ⑫ T-T-P, XVI, pp. 190~191; "Ex quibus.....respectu" の T-P, II-VIII, p. 279 と T-T-P, XVI, p. 198 の T-P, II-XXII, pp. 302~303 と、殆ど文字通りに出ている。ただし T-T-P, p. 201 の回答は T-P, III-VIII, p. 287 と違っている。

- ⑬ A, Wernham, Introduction to the Political Works of Spinoza, p. 11.

- ⑭ C, Gebhardt, Spinoza Opera II, Ethica ordine geometrico demonstrata, Heidelberg, 1972. (以後'E.と略称する)。
C, Gebhardt, Spinoza Opera I, Korte Vandelig van God, de Menschen deselfs Welstand, Heidelberg, 1925 (以後'K. V.と略称する)。
C, Gebhardt, Spinoza Opera I, Renati Descartes Principiorum Philosophiae, Heidelberg, 1972. (以後'S-D, P. P.と略称する)。
尚、読解の参考として、島中尚志訳、岩波文庫「エチカ」上・下、一九七八年、「短論文」一九四六年、「デカルト哲学原理」一九七九年、及び Philosophische Bibliothek 92, 91, 94, Hamburg. を用いたが、以後の注では Gebhardt 版大を記す。

- ⑮ E. IV propositio XVII scholium' p. 221, K. V, II-III, Lydings oorspronk, Lyding uyt Waan, p. 56. E, III De Origine, & Saturâ Affectuum, pp. 137~204.

二、文献読解への予備作業

予備作業一、「神学政治論」について

スピノザ政治思想の一断面 (藤本)

- ① 拙稿「私のスピノザ研究の覚え書き」——形而上学について(1)——国士館大学大学院紀要第3号、一九八三年、一四四～一四五頁。
- ② Epis, XXIX, pp. 164～165.
- ③ Epis, XXIX の文面を裏付ける内容を caput I～XV の中に含む T-T-P. は一六七〇年に出版され、また E. は Epis, LXII に依り一七七五年七月に完成したと断定できるからである。
- ④ Günter Gawlick, Baruch de Spinoza, Theologisch-Politischer Traktat, Einleitung, Hamburg, 1976, S. XV. T-T-P Textgestaltung, p. 363.
- ⑤ Epis, XXX, p. 166.
- ⑥ 他に「ライプツィヒ・トマジウスやアルミニウス派の神学者フィリップ・ファン・リンボルフ等が掲げられる」Epis, I, pp. 238～241. 工藤喜作「人類の知的遺産」35、講談社、一九七六年、二七九～三八〇頁。G. Gawlick, a. a. O., Einleitung, S. XIII.
- ⑦ Epis, XLII, LXI, LXVII, LXXI, LXXIII, LXXIV, LXXVI.
- ⑧ 畠中訳「神学政治論」岩波文庫、八頁。本稿注ニ、①・③を参照せよ。
- ⑨ 一二年休戦条約により、共和国はスペインから独立国の扱いをうける。世界各国史、7、山川出版社、中央史(以下山川と略称)中央史年表、一六頁。森尾忠憲「デモクラシー論の先駆」学文社、一九八三年、四一頁(以下森尾と略称)。
- ⑩ 桂 寿一「スピノザの哲学」東京大学出版会、一九八〇年、二九三頁。畠中訳「神学政治論」文庫、一〇～一一頁。山川、二九三頁。
- ⑪ 高瀬 学「エラスムスの『平和の訴え』をめぐって」国士館大学大学院紀要、昭和五十六年、四七～四八頁。大塚久雄「社会経済史講座」IV、岩波、三三〇頁。
- ⑫ 山川、二九二頁。森尾、三七頁。
- ⑬ E, H, Kosman and A. F. Mellink, Texts Concerning the Revolt of the Netherlands, Cambridge Univ., 1974, pp. 166～169. 森尾、五五頁。栗原福也「ネーデルラント共和国連邦」岩波講座世界歴史 15、一一九～一二一、一四一頁。(以後栗原と略称)。T. Merry, The Kingdom of Burgundy or Arles F. from the Eleventh to Fifteenth Century

in Cambridge Medieval History, Vol. 8, pp. 336~337.

⑭ 高瀬「前掲書」四三頁。

⑮ 山川、二九四頁。栗原、一〇一、一二一~一二三頁。森尾、五七頁。

⑯ 連邦議会の議長兼法律顧問をいう。森尾、五八頁。

⑰ 栗原、一四一頁。森尾五九頁。P. Geyle, *The Netherlands in the 17th Century*, London, 1961, p. 140.

⑱ 森尾、六六~六七頁。山川、二九四頁。畠中「神学政治論」文庫、一〇頁。E. H. Kosman & A. F. Mellink, *ibid.*, pp. 199~170.

⑲ 森尾、六八~七〇頁。山川、二九五頁。畠中「前掲書」一〇頁。P. Geyle, *ibid.*, p. 74~77.

⑳ 山川、二九五頁。桂「前掲書」二九五頁。

㉑ 山川、二九九頁。畠中「神学政治論」文庫、一〇頁。森尾七七~八三頁。Geyle, *ibid.*, pp. 60~63.

㉒ 森尾、八四~八五頁。Geyle, *ibid.*, pp. 19~25, pp. 38~49.

㉓ 畠中「前掲書」一一頁。

㉔ 桂「前掲書」二九四頁。

㉕ 桂「前掲書」二九四頁。畠中「神学政治論」文庫、一一頁。山川、二九六~二九八頁。

㉖ 桂「前掲書」二九五頁。畠中「神学政治論」文庫、一二頁。

予備作業ニ「国家論」をこつ

⑳ 桂「前掲書」五七頁。

㉘ T-P, I-V, p. 277, II-I, XXII, p. 267, p. 283.

㉙ 同じ時期に、「神学政治論の補注」、「ヘブライ語の文法綱要」、「紅論」及び「確立に関する論談」等も作成された。畠中「国家論」文庫、一九四頁。工藤喜作「前掲書」三〇頁。

㉚ Epist., LXXIV, pp. 335~336.

㉛ 彼の政治理論の特徴をなす社会契約説を論述した T-T-P, XVI の内容が T-P, I に集約されている。

㉜ 工藤喜作「前掲書」三〇六頁。

スピノザ政治思想の一断面(藤 本)

- ③ 山川、三〇五頁、森尾、八八頁。Geyle, *ibid.*, p. 133.
 - ④ 工藤「前掲書」三〇六頁。
 - ⑤ 森尾、九〇頁。Geyle, *ibid.*, pp. 203~206.
 - ⑥ 山川、三〇四頁。
 - ⑦ 森尾、八七~八八頁。山川、三〇五頁。
 - ⑧ Geyle, *ibid.*, pp. 50~57.
 - ⑨ 桂「前掲書」三〇五頁。
- 三、個物としての人間
- ① ホッブズは、物体の運動法則を自己の哲学の第一原理とし (Leviathan, I—III, I—II, I—III, De Corpore)、『其処から認識論や情念論を展開しながら (Leviathan, I—VI~IX. De Homine) 政治や宗教問題を取り扱っている (Leviathan, I—X~XVI, II, III. De Cive)』。Hobbes, *Opera Latina* 3, *Leviathan*, Germany, 1966. *Opera Latina* 2, *Homine*, 1966, I—XV, pp. 1~130, *Cive*, II—XVIII, pp. 157~414. *Thomas Hobbes, The English Works*, Vol. I, *De Corpore*, London, 1939.
 - ② 政治問題へのマンローチの仕方をマキアベリに倣ったものと思われる。マキアベリ「君主論」第一章で同様の内容が論じられている。池田 廉訳「君主論」中央公論 16 一〇五頁。Tutte le Opere di Niccolò Machiavelli, Italy, 1994, XV, pp. 48~49. (ed. Francesco frola).
 - ③ T-P, I—I, p. 267.
 - ④ T-T-P, XVI, p. 189.
 - ⑤ T-P, I—I, p. 267 加藤 節「近代政治哲学と宗教」東京大学出版会、一九七九、一六八頁。
 - ⑥ 加藤「前掲書」一六八頁。
 - ⑦ W. Leyden, *Seventeenth Century Metaphysics*, 1968, p. 244.
 - ⑧ E., I, propositio X, pp. 51~52. T-P, II—III, p. 270.
 - ⑨ E, I, definitio VI, p. 45. K. V., I, Cap. II, pp. 19~27.

⑩ 拙稿「私のスピノザ研究の覚え書」国士館大学大学部紀要 3 号 一四九頁。E, I, propositio XVI, XVII, XXXIII, p. 60, 61, p. 73. K, V, I, Cap. IV, pp. 36~39.

⑪ 加藤「前掲書」一五一~一五二頁。

⑫ ウナムーン著作集 3 「生の悲劇的感情」神吉敬三郎訳、法政大学出版局、一九七五年、三~五頁。

⑬ “Τὴ ὄν ἐπορεύει; ὁ νόμος ἀμαρτία; μὴ τένορτο ἀλλὰ τὴν ἀμαρτίαν οὐκ ἔγνω εἰ μὴ ἀὰ νόμου, τὴν Τε γὰρ ἐπιθυμίαν οὐκ ἦσεν εἰ μὴ ὁ νόμος ἐλάττω Οὐκ ἐπιθυμήσας. New World Bible Committee, 1969.

⑭ 桂「前掲書」三一八頁。加藤「前掲書」一六八頁。

⑮ 桂「前掲書」三一八頁。

⑯ L. Strauss, Spinoza's Critique of Religion, N. Y., 1930, p. 244. 加藤「前掲書」一六九頁。

⑰ 桂「前掲書」三〇九頁。T-P, II-IV, p. 271. S-D, P. P., II-XXXVII, pp. 224~225. T-T-P, XVI, p. 189.

⑱ T-T-P, XVI, p. 189.

⑲ E, I, propositio XXV, scholium, p. 24.

⑳ E, I, propositio XXIV, p. 24. S-D, P. P., I, propositio X, XII, pp. 168~169, pp. 169~170.

㉑ E, III, propositio VI, p. 102.

㉒ E, III, propositio V ㉒ ㄣㄥ。

㉓ E, II, propositio XIV, p. 59, III, propositio VI, p. 102.

㉔ T-P, II-IV, p. 271. C. E. Vaughan, Studies in the History of Political Philosophy Before and After Rousseau, p. 66.

㉕ E, III, propositio IV, p. 101.

㉖ T-T-P, XVI, p. 175.

㉗ E, III, propositio V, p. 101.

㉘ 桂「前掲書」三二五頁。

㉙ T-P, II-V, p. 271.

- ① E., III, propositio LVI, p. 140.
- ② T-P., II-V, p. 271.
- ③ T-P., II-XVIII, p. 276.
- ④ T-T-P., XVI, pp. 177~178.
- ⑤ T-P., II-VIII, p. 273.
- ⑥ T-T-P., XVI, p. 177. T-P., II-XIV, p. 275.
- ⑦ T-P., II-XIV, p. 275. 加藤「前掲書」一七二~一七三頁。
- ⑧ 自然權と計算の理性
- ⑨ T-T-P., XVI, p. 178.
- ⑩ 拙稿「『レヴィアタン』の成立と『前掲書』の成立」『国士館大学文学部紀要』一九八二年、九四~九七頁。S-D.P.P., II, propositio IX-p. 198, X-p. 199, XI-p. 199~210, XXXIV-p. 221 scholium p. 191.
- ⑪ S-D.P.P., II, propositio XVIII~XIII, pp. 207~211, Oeuvres de Descartes VIII-I, 1974, paris, XL~XVL, pp. 97~99. E., IV, propositio II, p. 168.
- ⑫ E., IV, propositio III, p. 168.
- ⑬ ⑤・⑥・⑦ T-P., II-XV, p. 275.
- ⑭ 加藤「前掲書」一七五頁。
- ⑮ Hobbes, Opera Latina, Leviathan, XIV, pp. 102~104.
- ⑯ Hobbes, The Elements of Law 1928, I-XV, pp. 57~58 (ed. Tonnes).
T-P., II-XVIII, p. 276 T-T-P., XVI, p. 182.
- ⑰ Hobbes, Leviathan, XV, pp. 102~103. 桂「前掲書」三〇九頁。
- ⑱ T-T-P., XVI, p. 179. T-P., II-XI, p. 274.
- ⑲ T-P., II-XV, p. 275. 桂「前掲書」三一九頁。

スピノザ政治理想の一断面 (藤 本)

⑭ T-T-P, XVI, pp. 180~181.

⑮・⑯ T-T-P, XVI, p. 181.

⑰ 桂「前掲書」三三三頁。

⑱ C. E. Vaughan, *ibid.*, p. 94.

⑲ 桂「前掲書」三三三頁。

⑳ C. Gebhardt, *Spinoza Opera IV*, 1972, Heidelberg, Stelkonstige Reekening van den Regenboog. Reekening van Kassen.

㉑ 桂「前掲書」一〇五～一〇八頁。

㉒ T-T-P, XVI, p. 177.

㉓・㉔ T-T-P, XVI, p. 177.

㉕ T-T-P, XVI, p. 178.

㉖ T-T-P, XVI, p. 182.

㉗ T-T-P, XVI, p. 178.

㉘ T-T-P, XVI, pp. 177~178.

㉙ 自然権の増大

① T-P, II-IX, p. 274.

② T-P, II-XV, p. 275.

③ 桂「前掲書」三三三頁。

④ T-P, II-IV, p. 271.

⑤ T-P, II-XIII, p. 275.

⑥ T-P, II-XV, p. 275.

⑦ 桂「前掲書」三三三頁。加藤「前掲書」一七五頁。

⑧ 拙稿「前掲書」一〇頁。Spinoza on Knowing, Being and Freedom, J. G. VAN DER BEND, 1914, pp.

118~119.

- ⑥・⑩ E., IV, propositio XVIII, scholium, p. 178. T-P, II-XIII, p. 275.
- ⑪ 加藤「前掲書」一〇〇頁。
- ⑫ T-P, VI-I, p. 352.
- ⑬ L. Strauss, *ibid.*, p. 236.
- ⑭ T-P, II-XVII, p. 276.
- ⑮ T-P, III-VIII, p. 281.
- ⑯ S-D, P. P., L, pp. 238~241.
- ⑰・⑱ T-P, III-I, p. 278.
- ⑲ T-T-d, XVI, p. 179. T-P, II-XVI, pp. 275~276.
- ⑳ T-P, II-XIX, p. 276, III-V, p. 280.
- ㉑ 桂「前掲書」三二九頁。
- ㉒ T-T-P, XX, pp. 225~233.

参考文献

- ① Hobbes, *Leviathan*, XIII~XV, pp. 97~111. J. Lock, *Two Tracts on Government*, Cambridge University, 1976 (ed. P. Abrams), I-IX-86, pp. 222~223, II-V-27, pp. 305~306. II-V-40, p. 340.
- ② T-P, I-I, p. 273.
- ③ 桂「前掲書」三〇九頁。Hobbes, *Leviathan*, XV, pp. 111~112.
- ④ T-P, II-XV, p. 275.
- ⑤ E., IV, XXII, corollarium, p. 181.
- ⑥ 加藤「前掲書」一八〇頁。

⑦ フリストテレス及びトマス・アクイナスは人間の本性を「*το ζῷον πολιτικόν* = animal politicum」と規定しながら、ポリス並びにコモンウェルスを倫理的・精神的な自然に発生した共同体として捉えている。Aristotle, *Politics*, Loeb, 1253a, p. 8.

スピノザ政治思想の「断面」(藤 本)

Thomas Aquinas, *De Regimine Principum*, I—J, pp. 2—3.

- ⑧・⑨ ヤスバース選集 23「スピノザ」、工藤喜作訳、昭和五十一年、二五二頁（原書が手に入らずやむなく訳本を使用）。
- ⑩ 打算的理性は、人間の内面には関与しないのである。
- ⑪ 政治社会の構成員となった人間が、打算的になお国家状態に於ても、憎悪や怒り或は詭計をもって争い合うと彼は考え
ている。T-P, III—IV, p. 279, T-T-P, XVI, p. 182.
- ⑫ 加藤「前掲書」一八一頁。ヤスバース選集23、二三二頁。